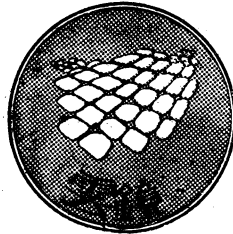


**切腹精神と気象** 天気7月号に佐藤順一氏の“故伏木測候所長大森虎之助君をしのびて”と題して、大正10年9月16日の異常進路を取った台風に対する警報処置の遅れたことによって生じた責任を負って自殺した、大森虎之助氏のことを書いている。又近畿防災気象連絡会発行のたいふーん第20号に“切腹”と題して乃木一葉氏が、簡単ながら、なかなか味のある隨筆的風刺文を書いている。オタマイ民族（otamay と書いて逆に読むと大和民族となる）のたてているノーヒン国（nohin）を逆に読むと日本となる）の天皇がノムナク（nomunak を逆に読むと関門となる）海峡を海で渡る時、測候所長が天気予報を出したところ、予報は適中せず、今にも雨が降り出しそうである。所長は責任を感じて切腹の用意をしているところ、曇っていた空が晴れてきたので切腹をやめたというのである。偶然に読んだこの二つの話は、それぞれ内容は異なるけれども、両方共に明治から大正にかけての切腹精神が、われわれ気象界の先輩の中にも例外なく浸透していたことを示すものようである。気象屋として時代の流れに棹さす1個の人間であるからやむを得ないことであろう。切腹精神など振り廻したら、今なら誰も相手にしないだろうが、気象の災害に対して天気予報はどうであったかがまず問題になりその責任追求の矛先が気象屋に向けられるのは今も昔も変りはない。気象屋はあんまりいい商売ではなさそうだ。(x)

**研究グループ** “研究グループとかいうやつがいくつもいくつでもできて少々目ざわりだね。“グループ外の人にはお目ざわりでも、盛に活動しているんだよ” “何もあんなに細分しないでもいいじゃないか？細分すぎると会員ひとりひとりがおらがグループを作るようになるね。セクト主義におちいるよ” “まあそう極論するなよ。業績のあがっているのを酷評するとひがみに聞えるよ” “ひがみとはけしからんなあ、好意的批評だよ” “御好意ありがとう” “しかしだね、グループ万能の感はないかね？グループに属さない研究は軽視されるように見えるし、AのグループとBのグループの間の領域の研究だって困るだろう。グループの真空地帯は救ってもらわなければやりきれないよ” “なるほど、そういうふうにも見えるかね” “もう一つ問題があるんだ。細胞研究グループぞく出のあげくのはにだね、総合研究グループというやつを作っておいてくれないか” “辛らうなひにくだね” “そこまでいって、はじめてグループ万能を認めるよ” “グループがオールマイティなどと誰も考えていないよ” “オールマイティをジョーカーで代用するぞ” “善意あるひにくだね” “まあいいさ、大いにやりたまえ” (い)



**器用** “わたしは器用でしょう。だから……”などと切り出されたのでは、相手は《こいつ分裂かな？》と首をかしげるか、“大きく出なすたね”とでも受け止める以外に手がない。——ところが先日職場で絵を描こうというので、その道の先生に来てもらい、いろいろと絵の話の聞いているうちに“器用な人はだめですね。何をやらしてもあるところまではいくけれども、それから先がだめなんです。そこへいくと、不器用な人は強いですね。不器用なりにうまくなったら独自の道を開いていきますからね”という説明があった。これだけ聞いておれば、“わたしは器用です”は“わたしは小成しかできないものです”の意味になり、へりくだった言葉になる。器用はもともと賢者国家之器用也と使って意味が違うからそんな理屈にあてはまらないなどという議論はやめにして、とにかく器用に立ちまわらないと、足もとをすくわれてしまう。器用人は処生がうまく、不器用では落こしてしまうのではこまる。器用が不器用をきらったり笑ったりせず、不器用が器用を“あいつは小成だ”などとあざけらなくなってくれないとこまる。妙な話になってしまったけれども、器用人だけが上位でパスできる教育を受け、器用人が社会でも常に優位に立っているのでは後世に残る名画は生れてこないだろう。気象の研究についても同じことが言えるなどとお説教はしたくないし、しようとも思わないが、少しばかり気になる。(I)

数値予報グループを初めとして、学会内部にいろいろの研究グループが組織され、グループ研究を行なっている。これは4、5年前には見られない状態であった。気象学の内容がより豊富になり、分化され、そしてより複雑化して来ている今日、これは当然の帰結といえる。各研究グループが個人研究の段階を越えて、グループ研究を行なっているその成果は、期して待つべきものがある。

だが、もう一歩進めて、各研究グループが共同で一つの問題をとりあげてことを考えてはどうか。現状では、台風は予報あるいは気象力学的研究を進めているグループのみで取り上げている。あるいは、降雨現象は、凝結核の問題をとりあつかっているグループだけで研究が進められている。このような態度は、現象を一側面からのみ見ているということになる。極論すれば、このような研究態度は、自分の穴の中からのみ世界を見ているといえよう。問題をより広い立場から、より深い目を取り扱うために、各研究グループ間の有機的な結びつきの下に共同研究がなされることが必要ではないだろうか。なかなか難しい問題だが、気象学における問題がもうその段階に達しているのではないだろうか。(Johe)